「太平会」回想録

増田健次

「太平会」の結成は大変古い。かつその存続も相当長期にわたった。昭和三十八年九月以降は正確な記録があるが、それ以前は結成当時の方々の記憶にまつしかない。確か昭和三十五年末、大平氏が第二次池田内閣の官房長官時代に、旧高松高商（現在香川大学経済学部）の第三回生（昭和四年卒）の有志が中心となり、微力ではあるが、物心両面より同氏を激励しようというのがそもそもの始めであった。第一回会合は赤坂の「千代新」。当初会員は大平氏の他、矢野良臣（日綿実業専務）、藤井良男（藤田組常務）、山田米次郎（岸本不動産常務）、米戸博（横河電機常務）及び福田睦治（東海銀行常務、故人）等であった。会の名称は「大平会」では少し生臭いので、「大平」をもじって「太平会（たいへい）」と命名した。当番幹事は輪番制、原則として月一回開催。席上大平氏より同窓生一名参加方の要請あり、同窓の私（野村証券専務）が昭和三十六年二月より参加することとなった。

次いで関西在住の河本光章（川一鋼管社長）、竹原康夫（関西製鋼社長、故人）の両氏。さらに昭和四十年鷹尾寛（日本興業銀行常務）、四十四年沢村貴義（日本通運社長、故人）、四十六年岡内英夫（資生堂社長）の参加を見るに至った。また大平氏の秘書官（森田一、菊地清明、真鍋賢二、福川伸次）の諸氏も逐次参加し、準会員として柳田誠二郎（日本航空社長）も三十九年二月から参加された。かくて解散直前には会員数十七名の多きを数えるに至った。当初は専ら夜の宴席だったが、大平氏はほとんど酒を飲まぬので、三、四回目からゴルフに変わった。のんびり気のおけない連中とゴルフを楽しみ、大いに英気を養ってもらうのが、会合の主たる目的とな

って行った。昭和三十五年暮れから解散日の五十五年七月まで約二十年間、正確な記録のあるものでも九十一回、記録のないものを入れると恐らく百回は優に越えていたであろう。

大平氏のゴルフは、口の悪い仲間の言によると、「粕取焼酎ゴルフ」といわれていたらしい。「まずいけれど強い」という意味らしい。私も何回か一緒にプレーしたが、なるほどと思った。当初はものすごくスライスしたものである。従ってティーショットは、スライスを計算に入れて、左四十度ぐらいのスタンスで打つ。それでいて、チャンとボールはフェアウエー中央に止まっているから不思議である。あの巨体から想像もつかない器用さであった。四十年代半ばからスライスも治り、真直ぐ飛ぶようになってたびたび優勝をさらっていった。私との戦いは、前半は頂き、後半はとられっ放しで、遂に収支は赤字に終ったようだ。しかし、一泊旅行時代、前夜祭で、山田、米戸両先輩を交えてよく麻雀をやった。こちらはつねに頂きで、負けた記憶はない。氏は大きな手をするとすぐ分かる。歌が出るからである。ことにお得意の「夜霧の第二国道」が出れば警戒ものである。正直で嘘のつけない性格やら、一旦こうときめたら絶対方針を曲げない芯の強さが、麻雀の打ち方にも出るらしい。

太平会の二十年間を振り返ってみて、氏は例会日は一日中楽しそうであった。少なくともその日は政治向きのことは忘れ、気のおけない連中と馬鹿話をしながら、ゴルフを楽しんでいるように思われた。後日、未亡人にお目にかかった時、「主人は太平会のゴルフを一番楽しみにしていました」と聞き、大変嬉しく思った。

最終回の当番は私であった。五月二十九日の参議院選後の最初の日曜日に例会を開くこととなっていたが、太平会解散の仕儀となったのは如何にも残念である。柳田氏寄贈の本カップは、創設以来の記録を副えてご霊前にお供え申し上げた。同郷、同学、同窓、昭和三年以来半世紀にわたる友人だった私が太平会解散の幕引きをやることになったのも、何かの因縁と思っている。心から大平氏のご冥福を祈る。

（野村総合理事会専務理事）